社説

七八年後の臺灣を思ふ可し

臺灣にして已に我版圖となりたる以上は其風俗習慣を日本風に化して一は以て文明普及の目的を達し一は以て治安維持の手段たらしむるの必要なるや今更ら事新しく云ふまでもなきみとながら如何にして日本風に化せしめんかと云はゞ日本内地の人民をして續々同嶋に移住せしむるの外なきは我輩の豫ねて論じたる所なり内地人民の移住已に必要と決したる以上は移住を奬勵するも猶ほ且つ其足らざらんみとを憂ふる位なるに政府が内地人民の自由渡航を禁じたるは如何なる趣意なるか甚だ解し難き次第なりしが政府も愈々近日に至り自由渡航を許可するの運に立至りしと云ふ我輩の聊か滿足する所なれども尚ほ一歩を進めて臺灣の富源事業等に關しては成るべく速に報告を内地の人民に與ふるみと北海道の開墾に關する報告の如くし且つ移住民及び企業家に對して及ぶだけの便益を授け政府として爲し得る丈の補助を與ふるみと肝要なる可し我輩は此事に就き絮々論辯するを避け政府が三十秒間も瞑目して將來の形勢を想像せんみとを勸告するものなり今日の如く人民の移住少なく土民をして其爲さんと欲する所を爲さしめて七八年の後、果して臺灣が日本の領地たるを保つ可きか我輩の痛心に堪へざる所なり今日に於てみそ朝野老成の識者が民心の過激に失せんみとを恐れて頻に沈靜慰撫の術を試み兎にも角にもして外交の圓滑無事を維持するみとなれども今日の實際は恰も一時の休戰に等しきのみ今後七八年を經過する其中には東洋の形勢次第に切迫して我帝國の獨り物外に超然たるを許さず我れは既成の軍備に依頼し滿を持して常に放つみとなきを勉るも人の來りて事を促す者あれば之を默々に附す可らず即ち老成人の慰撫策も盡き果るの日にして或は不幸を想像すれば外戰の必無を期す可らず此悲しむ可き時に當り臺灣に移住民の數多くして其數從來の嶋民と匹敵する程の勢を成すに非ずんば土匪蜂起は無論或は支那の邊より無頼の徒も來襲して遂には全嶋一般殺戮の修羅道に陷るなきを保證す可らず假令ひ守備の軍隊あるも一旦の急に國事多端中央政府に於て絶海の孤嶋を顧るに遑あらざるのみか其嶋民に報國の赤心なしとすれば軍隊は恰も孤立して土匪の征伐に忙しく唯奔命に勞するのみ危險極まるものと云ふ可し左れば我輩は今の謀を爲すに内地人を奬勵して一人も多く該嶋に移住せしめ處々群を爲して土地の實權を握らしめんみとを勸告するものなり斯くて嶋地に真成の日本臣民を得て其數十分なるときは萬一の日に土匪の蜂起するあるも我れは臨時の義勇兵を募りて市邑の保安を維持し守備の軍隊をして自由に討伐の任に當らしむるを得べし兎に角七八年後外交の形勢を臆測すれば臺灣のみと一日も忽にすべからざれば當局者たるものの自由渡航を許可するに滿足せず更らに進んで臨機の手段を用ひて内地の人民を同嶋に充實せしむるを急るべからざるなり

○瀛海の中電

[illegible]館を出帆して根室國花咲港に向ひしも流氷の爲め函館へ引返し來りたる事は已に此程の紙上に記載せしが尚ほ聞く所に據れば同船は米噌其他の日用品と百名計の船客とを搭載し去月三十一日函館を出帆してサル、沖まで進航するや流氷累々として如何にも危險なれば一應引返したる後再び航行を試みたるに幸に流氷少かりしかば最早二時間も經なば花咲に到着すべしと孰れも勇立ち居たる折柄忽ち西南の風吹荒みて又々無數の氷塊を押寄せ來り一望唯氷山の兀々たるを見るの有樣なれば到底進航せんみと覺束なしとて終に其儘引返し去る五日函館へ歸港したるよし然るに此の航海中絶の爲めに食用品の缺乏を來して恐慌無しとも限らずと電報し根室郡長よりも亦た出張所米噌缺乏せるを以て積取の船舶を早く航行せしめたしとの事を電報し來りたるのみならず尚ほ引續き再び玄武丸伊勢丸の兩船を出帆せしめんと電報を出せしに流氷の模樣を問合せたるに根室出張店より「出帆止すべし航海見込無しと返電し來りたるも左りとて室の恐慌を知りつゝ恬然と坐視すべきにも非ざれば一流氷の爲め目的地たる花咲に達する能はずんば厚岸其他便宜の港灣へ積荷を陸上して之を馱送せんの見込にて玄武丸は去る六日、伊勢丸は翌七日に

○帝國大學のX線試驗

左に掲げたる手の圖は帝國大學理科教頭山川健次郎氏、教授鶴田賢次氏が知に據りて工夫し去月中旬遂に寫影せしものなり鶴田氏曰くナニ負けはしませんが向ふは器械藥品等凡てのみならず其藥品も近頃欠乏を告ぐる如き次第、肉を透して骨を撮影する結果は得られたれども、其が果してレントゲンのものと同じ原因に出しや否や分明ならず由て諸種の試驗に據り雜多の現象を縱横に究めて我等の用ひたる光線はレントゲンの所謂X線なるを究め得たり由て今は撮影はソツチ除けとして理窟一方に頭を突込み居れり云々

高等學校にては兩氏研究の結果を追うて墓口、尺度、小刀、魚、龜、鳥、匣入分銅等種々撮影せしに皆分明に出來たりと

○玄武丸の出帆

玄武丸が去月[illegible]日函館を出帆して根室國花咲港に向ひ

○瀛海の中電

郵船會社の汽船玄武丸が去月[illegible]日函館を出帆して根室國花咲港に向ひしも流氷の爲め函館へ引返し來りたる事は已に此程の紙上に記載せしが尚ほ聞く所に據れば同船は米噌其他の日用品と百名計の船客とを搭載し去月三十一日函館を出帆してサル、沖まで進航するや流氷累々として如何にも危險なれば一應引返したる後再び航行を試みたるに幸に流氷少かりしかば最早二時間も經なば花咲に到着すべしと孰れも勇立ち居たる折柄忽ち西南の風吹荒みて又々無數の氷塊を押寄せ來り一望唯氷山の兀々たるを見るの有樣なれば到底進航せんみと覺束なしとて終に其儘引返し去る五日函館へ歸港したるよし然るに此の航海中絶の爲めに食用品の缺乏を來して恐慌を惹起したるは根室なり元來同地へは本年の初めより秋田米八千石を輸送すべき筈なりしを是迄輸送濟と爲り居たるは僅に二千石のみに止まり殘り六千石は未だ輸送の運に至らざりし事とて糧米の缺乏を來せるは云ふ迄も無く玄武丸が去月一日に花咲へ航行して無事に積荷を陸上したるに止まり其後再び同港に投錨したる時の如きは流氷の來襲したる爲め積荷を悉く陸上するみと能はずして引返したる儘なれば味噌其他日用の食料品さへ缺乏を告ぐるは當然の事にて同地の郵船會社出張店よりは去る五日函館出張店へ向け食用は僅に三四日を支ふるに過ぎず事甚だ急なれば人民恐慌の憂へも花咲に向て函館を出帆したりと云ふ

○二師團の歡迎準備

野戰第二師團が近日凱旋するに就ては同師管の各縣官民有志は目下孰れも熱心に歡迎の準備中なるが中にも宮城の官民有志者は此程仙臺市の縣會議事堂に協議會を開きたる末經費豫算を七千七百餘圓と定め之を各郡市に分擔する事に決したるよし其歡迎方法の大略は同師管轄境に凱旋門を作り軍隊輸送の汽車をして其門を通過せしむる事、管轄境より三十間毎に歡迎旗を樹つる事、有志者總代を越河停車場に出張せしむる事、役所々在地停車場には郡長町村長及び委員、其他の